

幼児グループにおける遊びの象徴的機能からみた 対人関係の広がりについての一考察

The Expansion of Interpersonal Relationships in the “Yōji-Gurūpu (Infant Group)” Activities : From the Viewpoint of the Symbolic Function of Play

高木 絢子*

Junko TAKAGI

I. はじめに

本稿の舞台は、子どもが大学院生および大学生スタッフと自由に遊ぶ“子育て支援幼児グループ”（以下「幼児グループ」と記述する）である。幼児グループには「セラピスト」や「クライアント」といった立場は存在せず、院生および学生と子どもがプレイルームに入り混じり、共同の場で各々自由に遊ぶ。ただしそこには「担当者」という確かな役割が存在する。そのため、プレイルームという場の中に一対一の関係性が点在し、それが時に二対一になったり複数対複数になったりしながらも、担当者と子どもという対の関係は確固たるものとして存在するという極めて臨床的な場である。そこで展開する遊びも臨床的な視点から捉えることができる。弘中（2005）は、遊びの治療的機能について、本来ならば相当の苦しみを伴うはずの心の作業を遊びという形で行うがゆえに、どこか傷つかずに精神的な守りを得ながらそれを行うことができるということを述べているが、本稿で取り上げる事例についてもそのような場面が見受けられた。また、交流の有無にかかわらず他児や母親も場を共有しているため、一対一のセラピーの場では見られない他者を媒介した遊びの様子から、事例の中で起きている前進や対人関係の広がりなどを捉えることができた。保育園・幼稚園といった保育や教育の場とは異なり、またプレイセラピーのような心理療法の場と少し毛色の違う場で、幼児グループに参加していたAくんと筆者の遊びを振り返りながら、ここで展開していた遊びの意味を考察することが本稿の目的である。

II. 幼児グループについて

事例について記述する前に、本稿の舞台である幼児グループについて概要を述べる。幼児グループは、埼玉工業大学臨床心理センターが深谷市と提携して行っている子育て支援事業であり、埼玉工業大学の大学院生および大学生が週に1回1時間という時間の枠組みの中で子どもと自由遊びをする場である。子ども1人に対し、院生あるいは学生2名が担当者となり、前半担当と後半担当に分かれて30分ずつ子どもと遊ぶ。その間、保護者は保護者同士でテーブルを囲み、臨床心理士および公認心理師資格を持った教員を交えて子育ての悩みを相談したり情報交換をしたりして過ごす。幼児グループへの参加対象と

* 埼玉工業大学臨床心理センター

なるのは保育園や幼稚園に就園する前の子どもである。

また、幼児グループは子育て支援という地域貢献を目的とした場でありながら、心理学を学ぶ院生および学生の臨床教育の場としての役割も併せ持っている。そのため、院生および学生は子どもとの遊びにおいて教育的あるいは養育的に“先生”のような関わり方をするのではなく、あくまでも心理臨床の立場から“一人の人間（個）”として子どもとの遊びの世界に入っていくことを目的としている。ゆえに、毎回幼児グループの最後には振り返りの時間が設けられ、担当している子どもとの遊びを全体に報告しながら、遊びの中でどのようなことが起きていたのか、何を感じたのかなどを全員で共有する。一人の子どもに二人の担当者がつく構造も、二人の担当者がいると子どもの違う側面が見えてくることがあり、同じ子どもでも相手によって遊び方が全く異なったり、同じ遊びをしても学生によって見方がかなり違ったりするという理由からきている（藤巻, 2018）。筆者は大学院生時代にこの幼児グループに参加し、次章に事例を挙げるAくんの担当になった。

Ⅲ. 事例

Aくん（2歳0ヵ月～2歳9ヵ月まで幼児グループに参加）

※クライアントとしての来所ではないため成育歴等については情報なし。

1. 家族構成

父親（38歳）…情報なし

母親（39歳）…真面目で、子育てにおいて「しっかり育てよう」という意識が強い印象。Aくんに対して余裕を持って接してあげられる時間が少ないと感じている。X年の秋頃に、翌年から幼稚園に就園することをAくんに伝える。Aくんが聞き分けのない態度を見せると、「もうすぐ幼稚園なんだからしっかりしなさい」と発破をかけるような声掛けをする場面がたびたび見られた。

Aくん（2歳0か月）…はっきりとした顔立ちをしており、知的な印象。語彙が多く会話がスムーズに成り立つ。好きなことに対する知識が豊富で、電車や新幹線の名前をよく知っている。遊びに関しても積極的であり、初回から物怖じせず母親のもとを離れ、筆者やもう一人の担当学生と一対一で遊ぶことができた。好んでいた玩具は、アイス屋さんセットやプラレール、シルバニア、ショベルカーやダンプカーなどその時々で変わるが、筆者とはアイス屋さんごっこをすることが多かった。遊びの中で他児との交流はあまりなく、担当学生と二人で遊ぶことがほとんどであった。他児がAくんと担当学生の遊びに入ってくると、身体を硬くしたり表情を強張らせたりして緊張感を見せる場面もあった。

※年齢は初回来所時のものである。

2. 事例概要

X年5月から幼児グループに参加し、参加当初からスムーズに遊ぶことができたAくんであるが、X年10月頃からAくんの遊びが崩れ始める。本章ではAくんの遊びが変化した時期を決壊期として取り上げ、3回のエピソードを記述する。また、決壊期後の経過を記述した最終回に至る3回のエピソードを

再建期として記述する。

以下、「」はAくんの発言、<>は筆者の発言、『』は母親および他児の発言である。

(1) 決壊期

X年10月26日 スペースに籠る

Aくんの前半担当学生が欠席したため、いつもは後半担当の筆者が前半を一緒に遊び、別の学生が後半にAくんと遊ぶことになった。Aくんが臨床心理センターに到着した時、筆者が「いつものお兄さんは風邪を引いてお休みだよ」と伝えると、それに対してAくんは何か言うわけでもなく、知らない学生（以下Bさん）が筆者と一緒に迎えに来た状況にポカンとしていた。プレイルームへ向かう間も、Aくんはずっと無表情で無言であった。

プレイルームには滑り台とジャングルジムが一体となった遊具があり、滑り台の下にはジャングルジムで囲われた三角形の小さなスペースがある（写真1・2。以下「スペース」と記述）。大人一人と子ども一人が定員のこの狭いスペースにAくんと筆者が二人で入り、アイス屋さんごっこをしている時に前半と後半の交代の時間となった（写真3）。

Bさんが来て、Aくんに「お姉さんと遊んでくれる？」と尋ねると、Aくんは僅かに頷いたため、筆者はそれを見て交代した。しかし、離れてすぐに筆者はBさんから慌てた様子で名前を呼ばれた。何かと急いで戻ると、Aくんが目に涙を溜めて今にも泣きだしそうな顔をしていた。何かを言いながらしゃくりあげており、Aくんの言葉をよく聴いてみると「違うお客さんがいい」と繰り返し言い続けていた。それを聞いたBさんはこの場を離れ、筆者が後半も継続することになった。



写真3. アイス屋さん

泣きながら「違うお客さんがいい」と訴え続けるAくんに、<わかったよ、大丈夫だよ>と声をかけながらそばで見守った。暫くするとAくんの混乱は少し落ち着いてきたが、それでもまだ幾度となく「違うお客さんがいい」と呟いていた。筆者は<それじゃあ違うお客さんを探しに行こうか？>と提案したが、Aくんは首を横に振って拒む。<じゃあ私がお客さんでもいいかな？>と尋ねると、「お姉さんはお客さんじゃない」。その後もAくんは暫く無表情で、心ここに在らずといった様子であった。筆者が玩具を指して<あれ持ってこようか？>と尋ねると、それに対しては首を横に振ってはっきりと拒否し、「お姉さんもここ」と言って自分が入っているスペースと一緒にいるよう求めてきた。それに応



写真1. ジャングルジムと滑り台



写真2. スペース

えてスペースに入ってくる筆者を、Aくんはじっと見つめていた。

筆者がスペースに入った後も、Aくんはぼーっと虚空を見つめていた。外の玩具を指さして「あれで遊んでみる？」と聞いても首を横に振って拒否するばかりで、筆者がスペースから出ることも嫌がったため、筆者もAくんの隣でぼーっと外を見ていた。暫く時間が経ってから、筆者が「Aくんはバニラのアイスが好きなんだよね」と話しかけた。すると、それまで何も言わなかったAくんから小さな声で「Aはバニラ」という呟きが返ってきた。スペースの中には前半で使っていたアイス屋さんの玩具があったため、「バニラってどれかな？」と筆者が尋ねると、「これ」とAくんが指さす。そこからAくんはアイスを手にとって選んだり、コーンに乗せたりし始めた。そうして終了時間になるまで、スペースの中で静かに遊んだ。

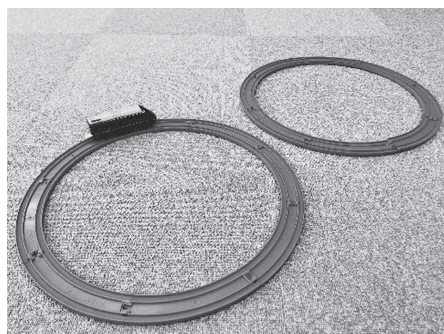


写真4. 円形プラレール

X年11月2日 プラレールを壊す

交代の時、Aくんは前半担当の学生に向かって「早くあっち行って！！」と声を荒げ、泣きながら苦しげに表情を歪めていた。只事ではない空気を感じた筆者はAくんの向かいに座り、「どうしたの？」と尋ねるが、Aくんの表情は硬く空気が張りつめていて、とても遊べるような雰囲気ではなかった。Aくんは筆者に向かって「これいらない！！」とプラレールを指さす。それは前半の時間に担当学生が作り上げたらしい大きくて立派なプラレールだった。「これ、いらないの？」と聞き返すと、Aくんは「いらない！！」と泣きながら訴える。「いらない」と何度も繰り返すAくんの苦しそうなお様子を見て、筆者は「今すぐ壊して」と言われているように感じ、ためらいながらもプラレールを少しずつ壊していった。その間もずっと、Aくんは「いらない」と言い続けた。筆者はプラレールをほとんどカゴの中に片付けたが、円形に組み立てられた小さな二つの線路だけは残した（写真4）。

輪になった二つの線路のうち、一方には自動操縦の電車がぐるぐると走っていて、もう一方には何も走っていなかった。Aくんは激しく泣いた後の疲労感を滲ませてぼーっとしている。少しでも遊べたらいいなと思い、筆者はAくんの好きそうな電車を選んで連結し、どんどん長くしていった。その様子をAくんはぼんやりと見ている。時々、「これどうやって使うか知っている？」という風にAくんに問いかけてみると、無言ではあるが部品を受け取ってやり方を教えてくれる。そうして長く繋げた電車をAくんに見せ、「どう？ かっこいい？」と聞くと、強張っていたAくんの表情が少し緩み、空気が柔らかくなった。

輪になった線路の上を自動操縦で走っている電車に、筆者が指でタッチをする遊びをしていると、その様子を暫く黙って眺めていたAくんは、筆者の真似をして「タッチ」と言いながら電車に触れ始めた。電車が目の前に来た時に二人でタッチをする。Aくんの声が次第にいつもの軽快な響きになってくる。次に、筆者が電車を待ち構えて指で通せんぼうをして、ぶつかるタイミングでさっと避ける踏切のような遊びを始めると、すぐにAくんも真似し始めた。二人で「サッ！」「シュッ！」などと指の動きに効果音をつけながら踏切遊びをしているうちに、Aくんの表情にはいつもの穏やかさが戻っていた。

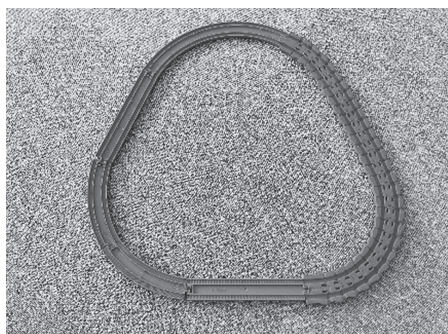


写真5. おにぎり型のプラレール

X年11月9日 おにぎり型のプラレール

「こっちで遊ぶ!」と、Aくんは円形に組み立てられたプラレールを母親の近くまで引きずっていく。筆者もそれを手伝って、もう一つあった円形プラレールを移動させた。持ってきたプラレールを見て、Aくんは「二つしかない」「三つがいい!」と泣き出しそうな顔で訴えてくる。続けて「ママの」と言う。筆者は「じゃあもう一つ作ろう」と言い、新しい線路を作ろうとするが、円形にするためのパーツが残っていなかった。<輪っかにできないみたい。まっすぐでもいい?>とAくん

に尋ねると、Aくんは「丸がいい!!」と譲らない。筆者が「じゃあ、あそこから少し借りてこようよ」と誰も使っていないプラレールを指すと、Aくんはそちらに視線を向けるが動こうとはしない。筆者がパーツを取ってきてAくんに「これでいい?」と渡すと、次からはAくんも一緒に取りに来た。そうしてなんとか丸に見えなくもないプラレールを作り終えると、Aくんはその形を見て「これ丸?」と聞いてきた。筆者はプラレールを指でなぞりながら、<丸だけど、ちょっとイビツだね。おにぎりみたい>と答えると、Aくんも「おにぎりみたい」と言って同じようにプラレールを指でなぞる(写真5)。

三つのプラレールのうち一つをAくんが使い、もう一つを筆者が使う。Aくんは輪のプラレールの中に入って、ぐるぐる回りながら手で電車を走らせる。筆者ははじめプラレールの外に身を置いて電車を走らせていたが、途中からAくん同様輪の中に入り電車を走らせた。暫くの間、隣同士で黙々と電車を走らせた後、筆者はおもむろに電車をレールから飛び立たせ、近くにあったショベルカーの上を走らせ、そのまま空を飛んでAくんのレールに降り立たせた。するとAくんは「(お姉さんのレールは) あっただよ」と言い、いきなり自分のレールを走られたことに少し不満な様子を見せた。筆者は「そだよね」と自分のレールに戻り、またショベルカーの上を走らせて空を飛び、今度は「ちょっとお邪魔しますよ」と言ってからAくんのレールの上に降り立って、そのまま自分のレールに戻った。Aくんは、今度は何も言わずに筆者の動きを観察していた。するとAくんも筆者の真似をして自分の電車をショベルカーの上に降り立たせ、空を飛ばせる。別々だったAくんと筆者のコースが一つになって、二人で「ガタンゴトン」と言いながら、順番に同じコースを走る。

終了の時間になると、Aくんは母親に電車を一つ渡して「これで遊んで」と言う。母親はそれを受け取って数回転がし、Aくんに戻した。するとAくんは、今度はその電車を筆者に渡して「これで遊んで」と言い、作ったものの使っていなかったおにぎり型のレールを指す。筆者は電車を受け取って、レールの上を走らせた。Aくんに「これでみんな遊べたね」と言うと、Aくんも「これでみんな遊べた」と言った。

(2) 再建期

X+1年2月1日 他児の侵入

布ブロックで電車を作る。先頭部分を高くしようとブロックを積み上げていたところに他児(Cくん: 3歳10か月)が近づいてきて、そのまま近くで遊びだした。Aくんはじっと見つめたまま動かない。すると、Cくんが『これ乗せたい!』とブロックを持ってきた。筆者がAくんに「<どうする?>」と尋ねる

と、Aくんは「いいよ」と言う。Aくんは別のところにブロックを積み上げ始めたが、ふと「ママは？」と言い、母親のもとへ走って行った。

キッチン台が気になったAくんは「これやりたい」と言い、母親を近くに引っ張ってくる。「野菜がほしい」「包丁がほしい」と要求しては筆者に探させるが、結局は一緒についてくる。その時、他児（Dくん：2歳6か月）が近づいてきて、Aくんがそれまで使っていたパペットたちを抱え出した。Aくんはそれを見ながら無言で立ち尽くしている。母親が『貸してあげる？』と聞くと、小さな声で「やだ」と答えた。じつとDくんの様子を見ていたが、結局Dくんはパペットたちを持っていかなかった。Aくんは筆者のほうを向いて「持って行かなかったね」とパペットたちを指さす。〈持って行かなかったね。よかったね〉と返すと、「よかったー」と安心したように言った。

片付けの時間になると、「やだやだ、Aはもう少し遊びたい！」と言って逃げるように滑り台を駆け上る。外に出てからも、Aくんは母親の注意を聞かずに石を投げたり、トイレに行くよと言われても無視したりと、聞き分けのないやんちゃな様子を見せていた。

X+1年2月8日 ホースで繋がる

Aくんはスペースの中からせせとボールを投げて滑り台の上を転がしていた。滑り台の麓にはEくん（3歳5か月）がいて、転がってきたボールを投げ返したり滑り台をよじ登ろうとしたりしていた。傍目には一緒に遊んでいるように見えるが、それぞれ個別の遊びである。Aくんと筆者がひとしきりボールを投げていると、ボールの出所を突き止めたEくんからの反撃が始まった。Eくんが筆者に、そしてAくんにボールを当てはじめる。Aくんは初めのうちは応戦していたが、そのうちEくんから見えないところに隠れてしまった。

筆者が風船ポンプを持ってくると、Aくんはホースの先を風船ではなくポンプ本体にもう一つ空いている穴に差し込もうとする（写真6）。用途が違うためぴったり嵌らず、「くっつかない、くっつかない」と苦戦する。筆者がくっついていないかのようにホースとポンプ本体を手で持って支えると、その状態でAくんはポンプを押し、空気を送り続けた。押しでも押しでも空気は行き場を失って出てこられず、Aくんは「空気出ないね」と不思議そうに言う。ポンプで誰かに風を送ろう、とAくんが提案する。まず「ママに」と言い、母親に向けてポンプで風を送る。次にAくんはスペースに入り、筆者に「空気でやろうよお」と言う。先程反撃してきたEくんが滑り台の上にいるため、AくんはEくんに向いてホースの先を向ける。それに気づいたEくんは、滑り台から降りてきてAくんの気づかぬうちにホースを抜いてしまった。少し経ってからホースが抜けていることに気づいたAくんは、「あれ？ここがないよ」と不満そうな様子を見せる。そして顔を上げるとEくんがホースを持っていることに気づく。また、ホースの反対側をAくんの母親が手に持ち、Eくんに向かってフーフーと息を吹き込んでいた。それを見たAくんは、「Aもフーフーしたい！」と言って母親からホースを奪い、Eくんに向かって息を吹き込む。吹いているかどうかかわからないくらい細かい息であった。筆者がEくんに〈届いてる？〉と尋ねると、Eくんは



写真6. 風船ポンプ

小さく頷いた。

野球盤で遊んでいる時に終了の時間となり、<お片付けしよう>と筆者が声をかけると、Aくんは「(球を)三つにしたい」と言う。二つの球が野球盤の上に出ていたため、レバーを押して球をもう一球出してあげると、Aくんはそれを拾って「三つになった」と言い、リセットボタンを押した。三つの球が野球盤の中に吸い込まれたところで遊びを終えた。

X + 1年2月15日 家から出発

Aくんの指示でダンプカーとショベルカーをスペースに駐車させ、その中にAくんも入る。続けてAくんは「お姉さんも入ってよー」と言うが、ほとんど隙間がなかったためちょっと入れなさそうだなあ>と筆者が言うと、「お姉さんも入ってよー」と繰り返しながらジャングルジムを登り始めた。滑り台の麓には誰かが設置したトンネルがあり、Aくんはスーッと滑ってトンネルの中へ入った。「あっちまで行こう!」とAくんが筆者を誘う。Aくんの誘いに乗って筆者もトンネルの中に入った。Aくんの後ろについて這っていると、Aくんが筆者を振り返り「お姉さんいける?」と聞いてきた。筆者が頷くと、Aくんはまた前を向いて進んでいく。

次に、Aくんは布ブロックで作られた家に一人ですんずん向かっていく。ブロックを動かして入口を作り、「こうやって入るんだよ」と説明する。<大きいお家だね、いいな>と筆者が言うと、「入りたい?」とAくん。<入りたい>と答えると、家の中に入れてくれた。その時Aくんが思い出したように「ママは?」と言い、母親の姿を探し始めた。壁が高く外が見えないため、布ブロックで階段を作る。母親の姿を見つけると、Aくんは「ママー!」と呼んでアピールする。それに気づいた母親がこちらに向かってくると、Aくんは筆者に「次はね、ママがね、ここに入る番だからね」と話す。<わかった、交代するね>と筆者が家の外に出て、少し離れたところで見ていると、交代で家に入った母親が『え?ママじゃないの?お姉さん?』とAくんに尋ねる。Aくんはなぜか困ったような表情をしている。『どっち(が入るの)?』と母親に聞かれたAくんは、「お姉さん…ママ…ママが入る…」と迷いながら答えた。しかしその直後、「Aもバイバイ!」と言って勢いよく家から出て、筆者を追いかけてきた。

IV. 考察

Aくんの遊びが崩れ始め、気持ちの不安定さが前面に出てきたのと時期を同じくして、Aくんが翌年から幼稚園に入園するという話が出てきた。就園という大きなイベントを控えていたことがAくんの崩れの根底にあったことは事実であろう。母親と離されるといふ漠然とした不安を抱えていたAくんが、遊びの中で外の世界と繋がる準備をし、二者関係から三者関係へと歩みを進めたプロセスを筆者は共に体験していた。本章では、そのプロセスの中で重要なテーマとして現れた「スペース」「円と三角形と直線」「二つから三つへ」という三つの視点から事例を考察したい。

1. スペース

Aくんとのエピソードの中で、“スペース”は非常に重要な場であった。X年10月26日の回(『スペースにこもる』)で、前半の担当学生が欠席するというイレギュラーが起きた。そのイレギュラーはAく

んの崩れを引き起こす一つのきっかけとなり、その後の回ではこれまで表に出てこなかった激しい主張や拒絶、悲しみといった本能的な感情が表出されるようになる。いつもの見慣れたお兄さんの不在、そして見知らぬ学生の出現は、幼稚園という未知を控えていたAくんの不安と重なり、言いようのない恐怖が喚起されたのではないかとと思われる。その時にAくんが身を置いていたのが“スペース”の中であった。恐怖の最中、声を上げて泣くでもなく、母親の元に駆けるでもなく、Aくんはじっと耐えるように涙を流しながらスペースにこもっていた。このスペースは筆者との遊びにおいてたびたび使われる場であり、中に入るとその狭さから閉塞感もあるが、一方で小さな秘密基地の中にいるような感覚も抱く。周りはジャングルジムの格子で囲われており、格子の間から顔を覗かせて外を見るとその瞬間プレイルームの中から自分たちの存在感は消え、現実から一步引いて外の世界を鑑賞しているような感覚が生まれる。このような身体がすっぽりと入り込む小さな空間について、藤巻(2001)は「小空間」と命名し、小空間は魅惑的であると同時に怖さも感じる異界であったり、中に入ることによって包まれ癒されるシェルターであったり、中に入る者同士に独特の連帯感や高揚感が共有される共同的な場として体験されると述べている。また、小空間には中に入る者を横並びの関係性にする働きがあり、客観的事実としては大人でも、小空間の中に入っている時は心理的に子ども同士、人間同士、もしくは個としての境界が緩み、名もない“枠の内側に存在するもの同士”として体験されているのではないかと考察している(藤巻ら, 2015)。この時のAくんにとって、スペースはまさしく自分を守るシェルターであり、筆者と共にこもることで混乱を鎮める共同的な場として機能していたと思われる。実際、筆者はこの時スペースの中で、混乱の渦中にあるAくんの息遣いからその不安な気持ちや動揺を肌で感じていた。その際Aくんと筆者の存在は確かに個として在るものの、その境界はどこか曖昧なようでもあり、Aくんの中からスペースに溶け出した不安の波に筆者も共に揺られているような感覚であった。二人でじっと波に揺られながら、寄せては引いてを繰り返す感情を枠の内側で共に体験し、そうしてAくんは守られた枠の中で自分の輪郭を取り戻していったのではないだろうか。

守られた空間、言い換えれば結果のような役割を持っていたスペースであるが、X+1年2月8日の回(『ホースで繋がる』)では、ボールの発生源となりAくんが次から次へと滑り台の上にボールを転がしていく。Aくんのこの遊びがきっかけとなり、Eくんと関わりが生まれることになる。この遊具は“こもる基地”としてのスペースと、“流れ出す場”としての滑り台が一体となっており、Aくんにとっての筆者の存在とどこか似たところのある象徴的な遊具であるように思う。Aくんにとって、筆者は「お客さんじゃない」(X年10月26日)という言葉で表現されたように、文字通りの他者ではなかった。筆者はAくんにとって、自分と外を繋ぐ橋のような存在であったのではないかとと思う。即ち、二者関係から三者関係への起点(動的な役割)であり、基盤(静的な役割)であったのではないだろうか。スペースのような基盤として、そして滑り台のような起点として筆者を使い、Aくんは外の世界へと繋がっていったのではないかと考える。

2. 円と三角形と直線

X年11月2日の回(『プラレールを壊す』)で、Aくんは前半担当者に対し「あっち行って!」と初めての拒絶を見せる。そして、筆者に目の前のプラレールを「いらない!」と訴えるのである。筆者は、何度も繰り返すAくんの「いらない」を、ただ目の前のプラレールに向けられたものではなく、なんだ

かわからないけれどとにかく気に入らないという実体のない不安を訴えている言葉であると感じていた。前半担当者で作ったプラレールは大きく立派であったがどこか空虚さも感じられ、虚構の城のように見えた。藤巻(2020)は、プラレールは電車というコンセプトにとらわれない見方をすることによって、空間的テキストとして見ることができると述べている。レールを繋いでいくという空間構成的な性質から、箱庭と同様にイメージを空間的に表現する装置として見るができるという。Aくんの「いらない」に応じて筆者はプラレールを壊していったが、全てを無かったことにしてしまうとAくんが一層苦しくなってしまうように感じた。この時筆者の胸中には、グズグズとした自分の状態に、そしてその根幹にある不安な気持ちに必死に抗っているAくんの試行錯誤を壊したくないという気持ちが沸き起こったのではないかと思う。ゆえに筆者は二つの円形の線路だけ残した。一方の線路には電車が自動操縦で走っており、もう一方は何も走っていないただの線路であった。ぐるぐると電車が走っている線路も、何もない静かな線路も、どちらも物悲しく寂しい感じがして、それは自分の感情を持って余し、どのように表現したらよいかかわからないAくんのもどかしさと似ているように感じた。筆者はこれまでAくんに対し、どちらかと言えば適度な距離を保ちつつ対等に関わろうとする父性的な傾向があった。しかし、この時の筆者はAくんの要求を飲まずにプラレールを残すという選択をした。これは、Aくんの寂しさを受けとめたい、Aくんの表現を守りたいという気持ちが引き出されたからであり、その母性的なアプローチがAくんの苦しさに溶け込んでいったために「いらない！」が止んだのではないだろうか。「セラピストの共感的な姿勢・関わりが子どもの状態とほどほどにマッチしているとき、子どもはセラピストにしっかりと受け止められ、守られていると実感する。そして、子どもはいっそう積極的に自分の感情や願望を表現し、そのことを通じて自分の問題に取り組んでいくのである」(河合, 2005)とあるように、Aくんの寂しさがプラレールを通じてお互いに共有されたように思われたその後、自動操縦の電車に指でタッチをする遊びや踏切ごっこなど、動きやコントロールをつける遊びが出てくる。これは筆者がAくんを遊びに誘いたい一心で始めたものであるが、それまで寂しい感じでぐるぐると走っていた電車が自動操縦ではなくなり、わくわく感やスリルという熱を伴った遊びに変化していった。

翌週のX年11月9日の回(『おにぎり型のプラレール』)で、筆者はAくんの要求を受け線路を作るが、Aくんは直線を嫌がり「丸がいい!」と強く主張した。結局円形にするためのパーツがなくおにぎりのような丸みを帯びた三角形になってしまったが、Aくんはそれを嫌がることなく受け入れた。これまでの丸という安定した形から、一つ点を増やした三角形を受け入れたことは、Aくんの中で新たな関係性の在り方が芽吹く兆しのように思えた。

X+1年2月8日の回(『ホースで繋がる』)で、Aくんは風船ポンプの穴にホースをくっつけようとするが輪にできず、ポンプを押しても空気が循環しない状態から、Eくんに向かって空気を送ろうと試みる。AくんとEくんがホースで繋がり、そこにAくんが息を吹き込む姿から、そしてAくんが送ったエネルギーをEくんが受け取ってくれた様子から、筆者はこの瞬間Aくんが外の世界と繋がったと感じた。X年11月9日の回でAくんが拒否した“直線”のやり取りがEくんとの間で展開したことから、他者と繋がる準備が整ったように思われた。X+1年2月15日の回(『家から出発』)で、Aくんはトンネルの中から「あっちまで行こう!」と筆者を誘う。Aくんに初めて明快な言葉で遊びに誘われた筆者がトンネルの中に入りAくんの後ろをついていくと、前に行くAくんは途中「お姉さんいける?」と筆者を気遣う様子を見せる。この時のAくんはとても頼もしく、受け身で不安を嘆く決壊期のAくんではな

かった。暗いトンネルの中でもがいていたAくんは、円の中をぐるぐる彷徨いながらエネルギーを溜め、おにぎり型を受け入れて三者関係へ踏み出し、そうして他者との直線的なやり取りを先導できるまでになったのではないだろうか。

3. 二つから三つへ

X年11月9日の回（『おにぎり型のプラレール』）で、Aくんはプラレールの数を「三つがいい！」と主張する。自分と筆者が使う分の他に、母親の分も作りたいという。そこで筆者はおにぎり型のプラレールを作るが、結局それは遊びの中で使われずただそこに在るのみであった。しかし、終了の時間が来た時にAくんは「これで遊んで」と言って母親に電車を渡す。続けて筆者にも電車を渡し、おにぎり型のプラレールで遊ぶよう求めた。この時筆者は「これでみんな遊べたね」という言葉が自然と出てきた。するとAくんも「みんな遊べた」と納得したように応えた。この瞬間、Aくんと同じ気持ちを共有しているのだという感覚がストンと筆者の胸に落ちた。北山（2005）は、日本独特の文化である浮世絵に描かれた母子像において、母と子が共にひとつの対象を眺める構図が多いことに着目し、これを「共視」と命名した。Aくんと筆者の間には、相手と膝を突き合わせて向き合うような関係ではなく、共視の概念にみられるような横並びの関係で互いに共通のものを見つめる関係ができていたのではないかと思う。だからこそ、ここで「みんな遊べた」ことがお互いにとても大切なこととして感じられたのだと考える。これに関連して、丹（2019）は「セラピストが子どもの心の目線に立ち、ことばではないレベルでの体験を共有することで心のつながりが育まれ、その関係性の深まりを通して初めて「ことば」が生まれてくる」と述べている。筆者はAくんとの間で「おにぎりみたい」なプラレールから受け取った“出発”の兆しを、言葉よりももっと深い部分で共に感じ合っていたのではないかと思う。ゆえに、この歪なプラレールを含めて“みんな遊べた”ことがこの時とても重要であり、その気持ちが自然に「これでみんな遊べたね」という言葉で表現されたのだと思われる。この回で見せた「三つがいい！」という頑なな主張の仕方や、泣くのを堪えている切実な表情といい、Aくんが必死に不安に抗いながら何かを掴もうとしているような、即ちこれまでの二者関係から三者関係へ歩を進めようとしているAくんの大きな一歩を感じさせるエピソードであった。

その後の回でも似通った場面があった。X+1年2月8日の回（『ホースで繋がる』）で、Aくんは野球盤の球を三つグラウンドの上に出してほしいと言い、出てきた球を手で拾い上げて「三つになった」と言ってからリセットボタンを押した。Eくと正面から向き合った後の展開であったため、Aくんが三者関係を自分の中に落とし込むことができたことを示唆するエピソードであると感じた。

V. おわりに

本稿では、Aくんが幼児グループという場で筆者や他児との関わりを通じ、外の世界へ一歩踏み出すプロセスをいくつかのエピソードを抜粋して考察した。聡明で聞き分けがよく遊びやすかったAくんは、決壊期で崩れて以降ガラス細工のような繊細さを見せ、常に緊張感を漂わせていた。この遊べない時間を乗り越えたAくんは、お片づけから逃げたり帰ることを渋ったりと、以前よりも甘えや我儘がストレートに表出されるようになっていき、子どもらしい子どもへと変化した。Aくんが二者関係から三者関係

へと歩を進めるにあたって、遊びの象徴的な機能という視点から関係性の広がりを考察できたことは、今後のプレイセラピーにとってクライアント理解の一助となるであろう。貴重な経験の場を与えてくれたAくんに心より感謝の意を表す。

VI. 引用文献

- 藤巻るり 子供が好んで入り込む小空間に関する一研究 箱庭療法学研究 vol.13 (2) pp43-56 2001.
- 藤巻るり 子育て支援幼児グループの心理臨床教育としての意義 埼玉工業大学臨床心理センター年報 第13号 pp22-32 2018.
- 藤巻るり 発達障害児のプレイセラピー 未分化な体験世界への共感からはじまるセラピー 創元社 2020.
- 藤巻るり・富樫直・加戸美光・永田千佳 ボールプールをめぐる遊び ―遊具を空間的テキストとして読み解く試み― 埼玉工業大学臨床心理センター年報 第9号 pp28-37 2015.
- 弘中正美(河合隼雄・山王教育研究所編著) 遊戯療法の実際 誠信書房 2005.
- 河合隼雄(河合隼雄・山王教育研究所) 遊戯療法の実際 誠信書房 2005.
- 北山修 共視論 母子像の心理学 講談社選書メチエ 2005.
- 丹明彦 プレイセラピー入門 未来へと希望をつなぐアプローチ 遠見書房 2019.

